



Title	ブラジル軍事政権の隠蔽と協働：軍政令第5号下におけるリオ国際歌謡祭での日本人歌手の実践
Author(s)	伊藤, 竜馬
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2026, 12, p. 57-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106322
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブラジル軍事政権の隠蔽と協働

—軍政令第5号下におけるリオ国際歌謡祭での日本人歌手の実践—

西洋史学 博士前期課程1年

伊藤 竜馬

1. 問題関心

2014年12月、ブラジル真実委員会が軍事政権下の拷問や殺害の実態を明らかにした。これにより、近年のブラジル政治史においては軍政下の忘れ去られた国家的暴力が議論になっており（橘 2025a など）、一般にも興味関心が高まっているといえる¹。これまで軍事政権は同時代的に検閲、拷問の実態を隠蔽してきた。

本研究の最終的な目的は、こうした軍事政権による隠蔽が国際的な文化実践の場においても維持されており、その背後には参加国側の利害とも結びついた協働関係が存在したことを明らかにすることである。そのため、本研究では1966年から1972年まで開催されたリオ国際歌謡祭（Festival Internacional da Canção、以下FIC）に着目する。軍事政権が対外的に国家イメージを発信するうえで重要な役割を果たしたのが、FICであった。なかでも日本は、当時のブラジルにとって重要な経済パートナーであると同時に、世界最大規模の日系社会を抱える国でもあった。本稿ではその予備的考察として、軍事政権の検閲史やFIC研究史を整理しながら、FICにおける日本人歌手の活動を検討する。

2. ブラジル軍事政権が落とした影と隠蔽

本章では、軍事政権の隠蔽とはいかなるものだったのか概観する。

1964年、軍事政権が成立した。だが、軍政開始後の輝かしい時間は一瞬だった。穏健派とされるカステロ・ブランコ大統領（任期：1964-67）は労働者の実質賃金を抑制する安定化政策を推進した²。しかし、軍の強硬派であるコスタ・エ・シルヴァ（1967-69）が大統領に就任し強権的な姿勢をとると、学生運動や労働者のストライキが相次いだ。さらに、同時期に起きたキューバ革命の影は、共産主義に対する脅威を軍部の間に募らせた³。

こうして1968年12月に発布されたのが軍政令第5号（AI-5）である。連邦議会や州議会は無期限に閉鎖され、人身保護令（habeas corpus）が停止した。そのため、治安機関による恣意的な

¹ 2024年公開の『アトム・スティル・ヒア』では、軍政に批判的だったがために行方不明となった夫の失踪の真相を追い求める妻の姿が描かれた。第97回アカデミー賞において国際長編映画賞を受賞した。ブラジル製作映画初のアカデミー賞受賞を果たし世界的に話題となった。

² Elio Gaspari, *A Ditadura Envergonhada, As Ilusões Armadas*, vol. 1 (São Paulo: Companhia das Letras, 2002), pp. 249-261.

³ Thomas E. Skidmore, *The Politics of Military Rule in Brazil, 1964-85* (New York: Oxford University Press, 1988), pp. 84, 85.

逮捕や密室での拷問が常態化し、国家による暴力の歯止めが利かなくなった。さらに大統領の権限で、政治家の権限剥奪や一般市民の政治的権利の停止などの処罰を超法規的に行えるようになった⁴。

なかでも第9条は、文化に深刻な影響を及ぼした。「革命の防衛」という曖昧な根拠を持って、戒厳時と同様の事前検閲が可能になった。映画や演劇、音楽を対象にした、政治的批判に対する検閲と、新聞や雑誌を対象にした、政権にとって不都合な情報に対する検閲が行われた。次第にメディア側も自主検閲に「加担」していく⁵。AI-5によってブラジルは凄惨な拷問や検閲が常態化した「鉛の時代」(Anos de Chumbo)へと突入していく。

1969年、メディシの大統領就任(1969-74)は国内により大きな影を落とした。秘密警察が絶大な権力を握り、政治犯に対する凄惨な拷問や殺害、失踪が国家の非公式なシステムとして日常化した。その反面、年10%以上の高度経済成長を経験し、大衆消費社会の到来、さらには1970年のサッカーW杯での優勝を経て社会は愛国的な熱狂に包まれていた。軍事政権は「誰もこの国を止められない」(Ninguém segura o Brasil)というスローガンを掲げ、国内のすさまじい状況を隠蔽し、「平和な、問題なく発展するブラジル」というイメージを国外へ発信していった⁶。

本研究の問いは、こうした軍事政権の隠蔽が果たして国内のみの問題として語られてよいのかという点にある。これまでブラジル国内の政治史の文脈で語られてきた軍事政権による国家情勢の隠し立てを、文化外交史という国際的な視座から再考し、なかでも日本との関係性に注目する。

3. FIC 研究史の整理

FICとは、1966年から1972年にかけて全7回開催された音楽コンテストで、国内部門と国際部門の2つで構成されていた。アウグスト・マルザガオン(Augusto Marzagão)が企画し、当初の目的は「大衆音楽の首都」としてのリオデジャネイロ(当時のグアナバラ州)の地位復権と観光振興だった⁷。第2回以降は盛り上がり目をつけたテレビグローボによってテレビ中継された。後援にはグアナバラ州観光局(Secretaria de Turismo do Estado da Guanabara)はもちろん、ブラジル外務省(通称イタラマチ、Itamaraty)やグローボ・オーディオ・ビジュアル録音システム(Sistema Globo de Gravações Áudio Visuais, Sigla)もついた、非常に国家的なイベントであった。

研究史において長く焦点とされているのが、レコード産業との結びつきだ。FICは、純粋で真正な音楽コンテストというより、テレビやレコード産業の見本市に過ぎなかった。ソウザ・モレイラ・グルーバー(2021)は、テオドール・アドルノの文化産業における「標準化」やエドガー・モランの「標準化と個別化のバランス」といった理論を用いて、FICの変遷を整理した。FICが

⁴ 発布直後だけで、約500人の市民(教授、ジャーナリスト、外交官など)が政治的権利を奪われた。Marcos Napolitano, 1964: *História do Regime Militar Brasileiro* (São Paulo: Contexto, 2014), pp. 102.

⁵ Beatriz Kushnir, "Cães de guarda: jornalistas e censores, do AI-5 à Constituição de 1988" (PhD diss., Universidade Estadual de Campinas, 2001).

⁶ Elio Gaspari, *A Ditadura Escancarada*, 2nd reprint. (São Paulo: Companhia das Letras, 2004), pp. 303, 304.

⁷ Thiago Rafael de Souza, Juliane Roberta Santos Moreira, and Tayná Gruber, "Os Festivais Internacionais da Canção (1966-1972): De atração turística à vitrine da indústria fonográfica brasileira," *Embornal: Revista da Associação Nacional de História - Seção Ceará* 12, no. 24 (2021): pp. 101.

いわゆる「フェスティバル音楽」という市場を形成するとともに、多くの歌手や作曲家を国内外に排出するショーケースとしての役割を担ったと指摘した⁸。

FIC の政治的性格を考察する研究も 2000 年代から増加した。FIC のショーケース化においては、政治的無害化がその通奏低音をなしていた。ズザ（2003）は、FIC のステージで若者が楽しみに歌い観客が熱狂する映像を海外（主に欧米）に配信することで、軍事政権が国内の実情を隠蔽し、「平和な、問題なく発展するブラジル」を喧伝するプロパガンダ装置として機能したと述べている⁹。

近年は、FIC を冷戦下のグローバルな文脈から再考する研究が隆盛している。フィリオン（2022）は、カナダの文化外交に対する無策ゆえに、意図せずして軍事政権のプロパガンダに加担してしまったことを示している¹⁰。本稿はフィリオンと同様の視角に立つ。

4. 日本人歌手の活躍

国際部門については、毎年 32 か国が出場し予選が 2 日間に分けて実施された。審査員は様々な国からマルガザオンが目をつけた音楽関係者を呼んでいたようである。年によるが決勝には 15 か国ほどが進出した。国内部門同様、最優秀編曲賞や最優秀歌唱賞、最優秀新人賞が別途存在し、優勝した歌手、作曲家も含めて雄鶏のトロフィーや賞金が贈られた。

全 7 回開催された国際部門において、決勝に進出したことがあるのは 40 か国ある。

●図表 1：FIC 国際部門（1966～1972）における各国の決勝進出回数¹¹

進出回数	国名
7 回	スペイン、フランス、ブラジル
6 回	イタリア、イギリス、アメリカ、ギリシャ
5 回	日本
4 回	オーストリア、ドイツ、イスラエル、メキシコ、カナダ、アルゼンチン
3 回	ポルトガル、モナコ、スイス、スウェーデン、ユーゴスラヴィア
2 回	ハンガリー、ペルー、チェコスロヴァキア、ジャマイカ、チリ、アンドラ、オランダ、ノルウェー、ルクセンブルク、アイルランド、パキスタン、オーストラリア、ベルギー、ウルグアイ
1 回	ソ連、フィンランド、パラグアイ、ニュージーランド、ケニア、スコットランド、レバノン

ここから、欧米圏が進出実績において優位性を示す一方で、アジア諸国のなかで日本が極めて特異な位置を占めていることがわかる。

具体的には、江利チエミ（『私だけのあなた』）、中尾ミエ、坂本九（『さよならさよなら』）、由美かおる（『渚の足音』）、金井克子、長谷川きよし（『バレイロ』）が参加した。なかでも、坂本

⁸ Souza, Moreira, and Gruber, "Os Festivais Internacionais da Canção," pp. 116,117.

⁹ Zuza Homem de Mello, *A Era dos Festivais: Uma Parábola* (São Paulo: Editora 34, 2003), pp. 354,355.

¹⁰ Eric Fillion, "Pop Friction: Performing Canada at the Festival Internacional da Canção Popular," *Canadian Journal of Latin American and Caribbean Studies* 47, no. 3 (2022): p.1-20.

¹¹ 『O Jornal』を参考に作成。

は優勝候補とも目されており、以下のように報道されている。

「日本の曲は、第 3 回 FIC における『最大の不当な扱い』と見なされた。フランスのマエストロ、ポール・モーリアは常に、日本が自分のお気に入りであると言っていた。...彼ら（アメリカの作曲家や代表団）はこの曲をフェスティバルの優勝最有力候補であり、『Mary』に対する最大のライバルと考えていたからだ」（“O Jornal” 1968/10/8 付「Vencedores receberam no Baile os prêmios do FIC」より）

5. ブラジルにとって親密なパートナーへ

日本人歌手が活躍する傍らには、日伯関係の緊密化があった。1950 年代以降始まった日本企業の対ブラジル進出は、1960 年代末から 1970 年代前半にブームを迎えた。東南アジア諸国において日本企業への反発が高まるなか、新たな投資先としてブラジルへの関心が強まったためである。家電・電機メーカーや食品メーカー、化学会社が積極的に投資を行った。金属や自動車部品、化学、繊維など様々な業界からの企業進出があった¹²。

貿易面においても日本のプレゼンスは拡大していた。1960 年代半ば以降、日伯間の貿易額は輸出入の双方で拡大を続けた。1969 年には対日輸出が 1 億ドルを超え、1970 年に対日輸入が 1 億ドルを超えた。1973 年には、輸出入ともに 4 億ドルを超えている。

同時期、日系社会のブラジル社会への接近も起こっていた。定住を決意した日本移民（とりわけ一世）は、子弟に大学教育を受けさせるため、都市部へ進出していった¹³。結果、二世を中心に政界や経済界への進出が進んだ。1969 年には初の日系大臣ファビオ・ヤスダ商工大臣が就任した。

6. 結論・展望

本稿では、FIC 国際部門における日本人歌手の活躍と同時期に、日伯間の政治経済的関係の緊密化や日系社会の接近が存在したことを、複数の学問分野を架橋することで示した。本研究の最終的な目的、軍事政権における隠蔽が、日本側の利害関係と協働していたことを示すための予備的考察を行った。

今後は、FIC の歌手選出や送出プロセスをより深く分析することが必要である。国際社会において「エコノミック・アニマル」と揶揄されるようになった日本が、1972 年の国際交流基金設立に見られるような文化外交を本格化させていく流れと共謀していた点を明らかにしていきたい。

¹² 子安昭子「日本・ブラジル関係史 120 年—相互補完を超え『共に (juntos) 』へ」『国際問題』645 号、2015 年、40-41 頁。

¹³ サンパウロ総合大学 (USP) を例にとると、合格者全体に占める日系人の割合は 1949 年段階で 3.8%だったものが、1978 年の調査では 12.9%に増加している。その他、カンピーナス大学 (UNICAMP) で 8%、短大集合体 (UNESP) で 9.3%を占めた。いずれの大学でも 10%以上は日系人が占めていた。1949 年については二木秀人調査資料、1979 年については外務省領事移住部『ブラジル社会に対する日系人の役割と貢献』を参照（ブラジル日本移民 70 年史編さん委員会『ブラジル日本移民 70 年史』ブラジル日本文化協会、1980 年、123-130 頁）。